



子どもの笑顔が輝き
勢いのある学校

No. 9 (H30. 6. 8発行) 文責 校長 福田雅也

自己決定力を育てる

体育会系の学科で大学時代を過ごした私は、「挨拶」に関して、当時の先輩方から厳しい指導を受けてきました。自分が先輩を見つけたら、「どこであろうと」「相手が気付いていなくても」「相手がどんなに遠くても」「立ち止まって」「相手に聞こえる大きな声で」挨拶をする。しかも、その挨拶は「ちわっ」というなんともかっこ悪いものでした。しかし、これが、鉄則だったのです。今、考えてみると、少し滑稽な感じすら受けるルールです。しかし、もし、これを守らなかったことがわかると、後日先輩方から厳しい指導があるので、当時は切実な問題でした。大学内を歩いている時はもちろん、街中を歩いている時も先輩方の姿がないかと、気を張っていたのを覚えています。

強制された、なんともかっこ悪い私の大学時代の挨拶とは異なり、甲佐小の2年生には、とても「素敵な挨拶」をしてくれる子どもたちが多くいます。昨年度の学校だよりでも紹介したことがあります。朝夕、職員室の扉を開け「先生方、おはようございます。」「先生方、さようなら」とわざわざ挨拶をしてくれるのです。また、私が廊下で2年生と会うと「校長先生、おはようございます」と可愛い笑顔で挨拶をしてくれます。中には、きちんと立ち止まっておじぎをしながら挨拶をしてくれる子もいます。

これら2年生の挨拶は、これまでの担任の先生方の指導によるものです。私は昨年発行した学校だよりに次のように書きました。

「この指導は、単なる挨拶から一步踏み込んだ指導となっているのです。挨拶の前に相手の名前が入っているのです。挨拶と同時に自然な形で「他者意識」が育つような指導をされているのです。温かい中にも信念を感じる素晴らしい指導だと感じています。」

「挨拶」をどのように指導するかには、いろいろな考え方があってと思います。中学校や高校では「校門一礼」という取組を行っている学校も多いようです。必ず立ち止まって礼をする、という指導も多く見受けられます。私のように、強制的に挨拶をすることを要求された経験をおもちの方もいらっしゃるでしょう。私は、どれもいい経験だと思っています。大事なことは、様々な経験の中で「挨拶」の大切さや気持ちよさを感じることができ、「自己決定」をしたうえで「素敵な挨拶」が身につくことだと思っています。

上に書いたあいさつは2年生です。では、それ以外の学年はどうなのだろうと思われるかもしれませんが、他の学年の子どもたちも、その子どもなりに、大きな声や笑顔で、あるいは、小さな声で恥ずかしそうに、挨拶をしてくれます。また、なかなか挨拶ができない子がいることも事実です。そして、それらの様子はその子の実態とともに、指導する教師の考え方も反映されているのだと思います。私はそれでいいと思うのです。今、甲佐小学校で画一化する必要はないのです。子どもたちには、今後も含め、いろいろな場面でいろいろな人から挨拶の指導があるだろうと思っっているからです。その中で、徐々に挨拶の大切さを実感し、「自己決定」につなげ、「素敵な挨拶」を身に付けてくれれば良いと思うのです。

そして、この考え方は、甲佐小が目指す最終的な児童像、自らの行動を自らの意思で決定していく「主体的に行動できる子ども」を育てることも視野に入れているのです。